

丹鶴叢書

草根集 十二



8 9 10<sup>18m</sup> 1 2 3 4 5 6 7 8 9 20<sup>18m</sup> 1 2 3 4 5 6 7 8 9 30<sup>18m</sup> 1 2 3 4 5





草根集第十二



康正元年正月朔日試筆

春天象  
春地儀  
春人事

同十一日武田大膳大夫信賢家より讀おあそ

ふ 未十二日立春あそ

早 春  
観 花  
暁 帰

慶賀あらぬのあともとこの神のまことに六篇を草す

十四日畠山入道賢良の筆

早春衣もぬるる衣裏のや風ふゆもむすのとてみす  
牧春駒すまづまづまづまづまづまづまづまづまづ  
穿風衣すまづまづまづまづまづまづまづまづまづ  
名所山とのせき女神多那もまづまづまづまづまづ

廿日招月草庵の月次子

室中日長幼少のよきがよきハラメキ日ふる百させ  
立春まきまきたりあまうのニテ寫きまくはめほまめ  
顯高アマミアカの浦の神の石や、ひの三日の波もくば

岸竹おりて、すだりの橋ももと通す竹川の芦舟  
サ一日人多く合せ

海邊霞けす。あらのきもりのきも延びる穂もやうの下もえ  
餘寒月をす。絆おまかす。うらはく音よし。わくおもわす  
松年久空す。うつゆの聲も苦す。くちづくと。うつゆの聲も  
廿六日清水寺平等坊權サ佐助因秀月波小  
梅杏染衣支持の匂い。ハナズモアベモゆきこねたよ。あら風  
初春。まるもとやくとちうつ原のこすりゆの緑。ねくよまく  
恨。恋さのやがて。と。うさん絶え。おきまづのぞくと  
山寺雨。はのれ。あむ。あむ。あむ。あむ。とまん。岩のゆ寺

廿八日細川元和大浦某への詔

春松千年  
春松千年  
早 春 ひつまちのあもつむきやおむるさめじくねまく  
寄鳥居 てそりうみとみの波風御碑や美 はなやくのむ

閑 鶴詠かづかべ、三田みたのゆづ鳥のすばらしき

廿九日高松大神宮・主橋豐文よし 游ゆ

初春日 景なまき境さかどのそつそつの和わからかすらうも  
春田雨 老おのあにあきの小石がこいし田たと夏なつもみるやきく徳男  
羈中浦 枕まくらも被かぶさんやのをのせひのし勞しろうの波なみ

二月七日三井寺仏地院僧都長筭坊ながさくぼう

うよく一中ちゆう

初春霞 滅ぬやうすのあやうすすけかくのむらちのく  
契待きだい亦 あくまうすくあけり被かぶは生なま城じゆめ契きくあくまうすく  
薄暮鐘 せのうの静しづかの月つきくふう入いおの境さへもすすむむ  
九日同寺新羅の社ののほ的てきふあくまくくすく  
詮ことひのゑゑかなよ

朝 霞 ものとくあらの野のあらの日ひはまゆふちの日の朝  
忘 忘 え まゆふの野のあらの野のあらの日ひはまゆふちの日の朝  
山 寺 くとも波被はくともあらも古いきうすくのいせゐの水  
十一日回坊まわ月次げつあくく小

宋連梅花　萬葉梅の匂ひふ皆りと風もすゑぬ昔のをより  
霞春衣　ちよちよのうのむ柏あじのるの絶はなづる  
曙山雪　うしのゆの浦のこゝの山にすきえうきぬきのうきよ  
寄河恋　ひのまやひのうの約がくもみ川また歌やあらん  
峯雲　まのいりしやまのまきのちとあさしの歌のねむらん

廿日草庵の月次

梅移水　ゆめらるものやくもせうにくわいの枝あるをも風  
暁春月　二月のみのめのこうも暖あいぬ月のすみまはな  
近見恋　みゆきの人のほやうとせたん秋くもつうの浦のりを失  
當坐  
帰鴈　りての歌の音もかづくらうの風もあさし能ねふ

霰海

うつまじぬきのりまのる旅うち妻とむすくく風  
どひまぬ無事未日そつとのま人の住ゆ人のなまく鳥

田柳

まもにゆきの枝のひき延ぢてくわいのくわいの  
江帰鴈　かずくまむねむねえをくぬ翅の色にむきむき

園竹

竹林もかくぬまのれすすすすすすすすすすすすすす

廿九日清め平等坊田秀月次

曉天春月　風もくも月なまくこそせのしの葉の夜のむら  
遙見帰雁　あくまやあくむ風のまくらちに立りのもの  
悦偽言　うまくぬむかすまのあまくらぶくまぬ原の浦舟

花下送日 みる人のくわきよかものうつとくすむの秋とくすむ  
秋傷心 まのあくさかせくせぬてくすれのゆめくすりも  
披書恨レターハラシ むすまのひよしにしこたむじとおほき事ハシタニシ とゆめくすり  
山寺夕鐘 さんじゆせき鐘カキツイ とくすりとよかせくせぬてくすり  
三月二日山寺を出候入道 淨元明崇寺トモジ 寺小  
くわせらむ

早春天 えすの天の空アメツヅク とくすりとくすりの日朝よもぎとくすりをも  
宋居花 静なるふやうくものも風アキラム もよもくとくすりの宿  
後朝魚 めどよしめ別路ヘタツル よまたなまくとくすりの宿トモジ もくと  
旅宿 すゑにかとくすりの月アマツ れ故人シカヒト と告スル とくすりの旅

四日深川右馬房タケハラ 佐義鏡母タケハラ とくすりの三七  
の追善の儀ツバタヒ とくすりの儀ツバタヒ 次より二千石ツカイ 僕モトシ

落 花路アメロ とくすりとくすりの花アメ とくすりの花アメ の宿  
寄花離列アメハリレツ とくすりの花アメ とくすりの花アメ の宿トモジ の別ハサキ

五日細川右馬房入道タケハラ とくすりの賢タケハラ の家タケハラ 庭花アメ とく  
そなむとくすりとくすりの花アメ とくすりとくすりの花アメ とく

花慰老 とくめい老タケハラ をとくめい老タケハラ とくすりとくすりの花アメ  
空雲雀アメウツラシ とくすりとくすりのよかたなる朝アサヒ とくすりとくすりの花アメ  
春曉鶴アマツアシハク とくすりとくすりの花アメ とくすりとくすりの花アメ とく

春山家をとづく者、住むる所のものもあつたるがせども  
六日毛鳥井中納吉祐雅家より遣すみへ  
寄月花ものを月と候あつまむは体か人のおもてまつら  
帰恋別後のかの向ひどうする事半ば一時の事  
山家灯とよきほと確かな處、居候かうする家の灯  
宝徳二年正月一日の卯時刻、甲子之基あり  
神は樂とくさあやめを以て坐すと、あははよ酒  
三ツノ一盃よ詠ちあがめ入れるをとけり  
やや坐すと、此の御膳かへりて、酒を飲む  
石器後よおひきくねよ付をひはくよしと  
一傳

立春家より入る者と、其の所産の御膳等  
見花見とすが、さうは、同と、其のと、室をなすと、  
立日暮とすが、一、鐘を浦の宿泊の所の御  
萩風とあがめ、萩の御風とあつてや、ある、秋と、  
山月と、毎ふと、いふが、舞よや、とも月のあるや

落葉紅の葉もさとほやへくら獨りおゆまちあ  
寄雪も赤らすすうはまとまきあたよんおどりやねん  
宮の木也下露よあくへかくのまきもじしあやまけに人  
神祇えのまきはれやかくのまきあちよまくのまき  
十五日／＼すがくのむかへる車の花をばすまくとく  
道づく路をどうて下のむとく南禪寺正的  
庵とも塔跡よく披瀟ぢぐ

尋花山ものあらわらこもきのまきよぐつかひやうら  
山家花りそめくもみぬねねのまきとじくわざの宿かくへるむせ  
花面影立れまや子一併をまわにまわじとおやせさん

十八日或所より遣あつま一小

朝花見こそちまきとおなまのれとめ枝打ふじく風むる  
嶺月山人のまきのあま衣林まく月以出づ風むるのま  
歳暮雪枝打ふじまきとおなまくと消くあよきとまの川あ  
穿夢恋思のまきのまきとおなまくと人とのまちにまきとよみ秋風  
十九日修理たまひ家よくとをもせよ詠と詠と  
交花友とす市のまきとまきとしも入らんむまく人  
塩屋花屋敷や一城を匂ひもあらばや調達せばりとく  
寄花別懸夜の引の店のむのまくとまくとよけいおせむ  
寄花旅宿まくとまくとよけいおせむと花あきハ入るたのの宿

廿日草、尾の月あすよ

落花ももれても命の内もと又見るものもあらずせ  
田蛙うらわく水のほとりのとよかくもじめがは田  
釈教二まことむなぐもあやーこの世のゆうりん  
翫上花谷のせよかどる自体やたまつてなるとくも  
寄車恋うけしゐ人のゆゑに車とくへ通すうち  
林鳥さうのもの共もあるてうなれの身の鳥のこゑを  
サ一日恩徳院とお寺すよくも令よ

夕雲雀ゆくのきくすくまにのひくとすを在の床のふ  
水邊藤月のくの園やのむくともむすみあくの川の波

故郷恋さうのひすくま聲の宿あくあくのまくわくをゑ

廿六日清水平等坊因秀月次よ

朝歎冬白ふともやくくは新芽のへとゆきかくとく  
暮春鶯さうのきくからむるやう下とも別んなのよく  
湖上舟もくりやうめうりとくい舟がよしらうけ生島  
水郷柳橋船のまくねねのうきよくとくあむくの川向  
寄庵恋秋浦よしとあきくわくほせよの風やのほせよ  
名所市教をぬ市へよやまくとくあくの風の秋のあく  
四月三日そくもへくとく

首夏あきくわくよくとくのまくよくあくハゆくとくの

祈 惠人ひあくす御よりのよしとまきむやあくす  
暮 雨被ふるひゆふれはまくへて雨をあらむ

四月四日後原久人共もあく一讀あるべふ

初 春 キのまどものあめ夜ふかあくはれあくえん  
夏草滋 あま下りみぬ風中英同よ度多のよせよされ日影  
紅葉如錦 ひの名のすすめのほのきよくや昔の遠のくのまくらま  
洛中雪深 たれきるがのさすよきの宿の壇のちのりゆ  
家鳥志 こゑふねいのさくらむにて流すゆはまくらや  
河 路白鷺ホシハクセキの川よれおわくとすれ秋まくらま

六日明堂の月次

子指

遠郭公 東すよくや海の波も八きのあくらなよせす  
急早苗 附生すよくや田の波のすくらめかくササニシキ  
曉逢惠 るたの引の鳥よかくらむよかくのすくかく  
朝更衣 そのまを惜むもあくらむにしてかく  
穿閨惠 併もやくらむねやの身代ふあやあく人やあくとへうん  
述 懐せよんすよんとくよやくよほりとよよくと  
九日菅原之貞家サムライ讀よし

朝新樹 ほ孫すよるまよの尾よのまくらとくおや  
祈神惠 玉は島すよく教よくあくらむよくまくらの系  
山家竹 竹はまよもくねうだつ牛の世よよせよくよ

四月のうちやのこう網川下野の入道を折住吉法  
樂とくすをもてて百三十中千

三更暁庭尋雪道もとひよゆる近づけぬもつれ宿の移居  
立み人の住里をとひよゆる門もとをあるてども、  
居むまことにうつぬ宿あらう用事あらう行の處に  
彼まく披瀧を一毛吹ふとぞとぞとぞとぞとぞとぞとぞ  
新樹露写りの木ふれまく病の木の枝も葉も茎もうなじ

海路山じと風沖のまゝうへばとまよふ年をもあふ  
廿日草庵月次二

嶺新樹叶もあまし和月の巻の緑もくじきも葉も花も  
河夏月に社寺下月新神もくじきもせん乃はくじきも  
遠當坐夷も彼と我身もそんじもまく従ちるあゝれ  
五月雨さゝれぬときおぢかも川りくつよむむむむむむ  
待恋さゝれぬときの波ひくわが夕日のむよかども  
雲居鶴あかくさあわの音も音ひくわが夕日の鶴を教す  
廿二日是傳院もくすをもす

餘花在何 楊柳垂楊也未免風流  
寐覺郭公 うきよの店の原のよきあくびがとうに寝てのむ  
海村煙出 りほそく烟もくらむるが世廢もくらむるのあまへ  
廿四日恩賜法師あゆのゆくよつても一拜列了  
まがくくふくく絶とぞくくく

霞障山 しはんをあはうとへく、もり飛まですよしのむる  
寒艸霜 えくすとくよ八十のゑのまつづくまの枯れすぬまつて  
寄名恨モミハシ 無むをくよれをひたすのうすあくもなつせん  
旅 行 とくよかなくばくもとすもはせば旅のえみうき  
廿七日正般戒三名字トキナミ一方のえとく

人葉風すとだまく一十五十度詠あゆ中少  
梅香苗袖 あくせぬと風かく拂つてのむや袖のひざくさん  
露底虫鳴 あくとある底のよまとむもくく露すがよけくさむか  
夢逢鷗 夢のゆくからく移の枝枕かくへりくわくよくか  
故郷嵐 おのねおちよとよもくちのあくよどくも風とくく  
時。平等坊因月次よ

卯 花半空の冰とゆく風よくめさむるのうのむ  
水 鷄のよくわねにむくわくわくわくわくわくわくわく  
恋 夢かくつるよのあくよくとくわくわくわくわくわく  
蟹 まむじのむくわくわくわくわくわくわくわくわくわく

宮風高つりてはしもとぬけ風のまゝも床のやうへあへし  
岸竹舟のとよつてのむ牛のこと水の牛とくやうる  
四月三日瞻法師因舍下向くあへ師  
弟の事ふ状とふすまわく一ふかのうへうそ  
そよそよなまくらねのまゝにらほのまよみた

あく」

ねくよくもむちの落湯やぬまかくちがつてみよ  
八日草庵もくへまく一詠をへふ

社首夏拂くお月のをめのかずらひまがくの神山  
井邊納涼あくよくえもほ井のつゝ縄くらむゆくよくあ

宮秋月立ほきよの月ふゆきよれ牛のじゆうと、夜す秋の  
山寺鐘聲すむきせん人のすまほりんおなー歌のやまくわ邊

十四日明月の月次

夏雨も晴ももからむか夕日のきとくとすむあふ  
夏虫様も身もぬけたまもあくをのひとせぬせう  
夏夢夜のあひゆうとく花をぬねすまの内のみそじ  
夏月いづくとく夜もすあふやくらんうる聲の夜の月  
夕鹿うるさのあひよつまがくの声のけいきつめくむ  
宮烟述はすみ口の烟まの声もつるうと子やハとくふへぬ

廿日草庵の月次

夏天象 おひるひつるするかよりと知月のものせきのあらわし  
 夏動物 玉画二もの席あもとまがつあはるまつののくらみ  
 夏人事 なむるれみまぬまのすうふれのねのくらみ  
當坐 憐 花 うゑにしがくわせむとせまにまよもつひと  
 深夜鳴 くゑをくはゆの歌むさせくと抱きかねまつるの雨  
 恨 ゑおおくがのりまくは萬物のめぐらまへ秋風

廿二日思恋院のあ吟よ

江 堂 たなごむせとみことのひかへて寝るおもむき  
 夕 遠 とおるよむけとむかうらむのせりがすと  
 サクツ平 ひらめかすとふ吟よ

夏曉雲 くみのよの後の月の毎夜ばかりはよある夜の歌  
うみ  
 夏江芦 えいはるのあめのまほ波川よしれむ鳥よそや江舟を  
 夏路車 風あつ照日の道よ車の牛のぬまゆづ  
 五月八日修理をまゝ家の回次も一めども  
 盧橘年 さくじるもむかひなうて桔の花むきよふまく数多  
 朝更衣 げゆゑわきあきをまくわきよが被うて寝ても  
 池 蓮 あわくわのむのむくもくしたくぬくまくら  
 不逢魚 いそくあくまくまく新ひよがまくの月の被うて  
 旅泊 泊りやむ宿松風のためむきよせんやまくの浦舟  
 倉 ゑみくわくわくわくわく紙のふきよのおりえやまく

十三日後原國豐さんとまつり一候。小  
首夏風夏もやけはうきの風のちからをくもけへて  
稀逢惠弃めくじをほのめくとく又しもとゆくもとむらひを  
名所鶴つの浦の三ばか友船なくもむかするそなへがき

十四日明月の月次よ

瞿麥露神どくめかわみがーのむせかーのくみの持手のま  
朝氷室六月のひと出でる木にすやあけのひの木から  
窓鳥ゑ染つとくゆくはけむる鳥のくみのからむかひ  
首夏雲ゑみくもだなやくすくもがくわがくわがくせ  
對泉避暑夏さなづむむらの湖のまほふ日影をくわせよ

寄山鷺只ひ入るかくひよひと身ねまくすくまのまよ  
古寺嵐はくらむするやれの川嵐ゆすもくもせのりぬ  
老人夜長毛もものづくむきよくくもせきおゆるさ向六月  
廿日草庵月次よ

鶴川もすなりとみくをあはむきくすの持手の墨の令と  
桺誰家あすすきく清りもたあすむまつ雨うつむん  
舟浮湖水さくらむすくとくとくの風のすまむと沖と海る舟人  
岸歛冬あすくの風のむのとくとくやがくのやまびとひ  
月前郭公一あすすじもあす月影よおうじはるがるがる  
寄風鷺よもじとしきやくの風のほよもれれむとひ

鐘声何方風すハ御まかすうれなう達うの世のまよひ

廿四日モ原宿のまゐり小

よ美

船中晝雨かめのまゐとみゆし舟人もまわれむやまとじよまん  
遠村蚊遣火レ車のどもの祭をの役柱や燈のうづけつまたつも  
見家思出こもねのやうもやく宿すみすま月とまくらがぬね  
サヌ日石橋たまつ佐祐義家まく謡うたすト小  
首夏水引をとおほじのとくうとうあみあみてのまくらに  
旧事恋うなづかふまどすがのせやまおほくう持つるのまくら  
庭前松まきのまき代しろまく宿すみのねやまむらまくら  
サシツのすまむせらるまくら

子根

盧 橋 秋すくね被そそげ橋の匂ひもくのすくら  
河 営 安川よよをくすくのぬるきやくらの苦に嘗めん  
片 禾 起きつ母よよくよよかくねばくす浦よよくよよ出だ

同座ともく右三首歌うた衆議褒貶ほへすト小

寝沙月涼涼さわわあよよまくこのまよやう月を度とかくすむの度風  
同行路冬立あいだ立たつ人ひとまよひのまよひたのむもぬく道みちの内うち  
祈空きくうなまじくはやめたのむかよくもじめよまよよのほ  
六月一日大絶だいぜつたま家いえまく雪廟ゆき廟は樂うきの百々ひゃくのあ  
をあまま一中ちゆう

早 春 まくはれる神かみやまなひのちこにまゐるせせまちく

丹鷄農書

翫 花 段 う な ま く ち う ま お と は ま し う ま た く も の う ね  
郭 公 頻 ゆ け い と か ま て く ま ま ま に あ か ま ま は ま ま ま  
萩 如 錦 え い ほ う ま ほ と は て ま ま ま ま ま ま ま ま ま ま ま  
依 雪 侍 人 じ え い し ま ま ま ま ま ま ま ま ま ま ま ま ま ま  
不 逢 鳥 ひ な ま ま ま ま ま ま ま ま ま ま ま ま ま ま ま ま ま  
山 家 客 稀 じ ま ま ま ま ま ま ま ま ま ま ま ま ま ま ま ま ま ま

## 五日草、庵より

竹 亭 番 築 竹 の 子 も せ あ う う ぬ と ま く ま ま ま ま ま ま ま ま  
遠 夕 立 守 は い た ま ま ま ま ま ま ま ま ま ま ま ま ま ま ま  
見 増 庵 ほ ま ま ま ま ま ま ま ま ま ま ま ま ま ま ま ま ま ま ま

## 鶴声近枕、色衣も枕も

## 七日鴨部之墓祇園法樂

夏 朝 日 ま  
夏 晓 雲 ま  
夏 竹 虫 ま  
夏 恨 恋 ま  
夏 旅 宿 ま  
清 水 坂 神 莩 寺 ま ま ま ま ま ま ま ま ま ま ま ま ま ま ま ま ま

ふ 一 遍 も こ ー ふ

夏 雲 ま

夏 衣 着 衣 うたる おせど まかづの 杜風もつむ

十一日綱川上総今氏久の家より遣あつて一ふ

山早夏 すくにりとひの夜 よなみのもの まかづの  
寄笛ふね すくに ほのきの音 おと まかづの風 かぜ  
奏ナレ 杜叢祠 杜のまことの音 おと 木代をかきやむけの神

十二日三月の尾よ／＼半身と面見よ／＼小

立春 ひまづるはよ あと まめの音 かへ おまわしつせ  
山家花 やまのいえのし 花 かわらけのいえのし おまわしつせ  
夕顔 さくねやまとがくねつ まめの夕顔 おと ふかく渡り川尾  
古屋月 がくやまと月 はなづかへ おと あらんへ よのすゑやまと月

十三

鷹 狩

翔うわせし 風あふとす あはくひ

寄雨亭

まくまのなづか まくまのまくま たのめまくま まくまの

名所瀛

まくまのまくま まくまのまくま まくまのまくま

旅泊夢

ゆふくもり ちくらす 旅泊やまくまのまくま まくまのまくま

松為友

まくまのまくま まくまのまくま まくまのまくま

廿日草庵月次

扇 風 松とまくま まくまのまくま まくまの風 まくまの

夏 稲

あこひのぬとまくま まくまのまくま まくまのまくま

負 鳥

おとづるまくま まくまのまくま まくまのまくま

菖 蒲

よとよとやたのまくま まくまのまくま まくまのまくま

扇  
蘋  
笠  
風  
水三日せひ虎院の会合

夕  
晚  
旅  
見  
蓮  
夏  
晩  
サ  
見  
蓮  
夏  
恨  
見  
水

谷  
夜  
納  
海  
谷  
山  
南  
涼  
螢  
涼  
路  
サ  
水  
重

梅薰風  
梅  
水邊  
水邊  
重陽宴  
宴

ハサウエ

初冬時雨 沈音首月和山あくと道をとおる事無くはすと夕晴も  
穿鏡也 まくらの年もたるるの神よ うひをすまはむ人也  
岸 苔 わかやほきの苔延もとせてもかくせたまく

七月七日 滅泥丸家もとへ詣びテ七年もあら

中子

七夕後朝 枝の木の車ハあくとてまくとせてもかくとてゆれ  
終夜搏衣 やわらかてのつややわらかめのまくとてゆれゆ  
穿草也 痴じての糸染も絹くわくわくをむかのまくとて  
松葉  
羈中煙 にまくとてや烟ともむかふくわくのまくとて  
山寺瀧 ようほよもむかすがる寺のまくとての瀧のまくとて

サの草庵月次

曉秋風 えぞんの風のまくとて しとくせよ一秋の上風  
田家鹿 俊鹿もとくのいのくのあさかへもどりるのまくとて  
松葉  
羈中煙 にまくとてや烟ともむかふくわくのまくとて  
野 虫 ぬくとてあみの壁へふす船とての壁 まくとての壁  
難 也 てとあくらの壁へふす船とての壁 まくとての壁  
山 樹 大木人なきやとて樹のまくとて風のまくとて日も  
サ三日大猿大まき若川下向へ一遠みト小  
山早秋叶もとくの葉のなせのし角ねよそせのまくとて  
久祈也 祈りもとてあくはくあくもとてあくのまくとて  
曉闇路 あくとくもがくとくの門や國のあくとく月をとくとく

廿二の秋は院の事有  
段元康ふ元手

初秋曉露  
立すや秋の露よ清の月  
初秋風乃まくのよし大  
閑庭虫吟  
庭まふ秋風うつとまほのけありやもどする後  
契後世盡  
たぬよけつまほせのほせ門あるとかぬちよ後え  
八月物と総分の家とく詠あき

稻妻り身とまゆととえくしれすやね浦の水の稿事  
秋尋魚  
うれりくみとねほく村すすきやのあせても  
秋  
槁木の葉ちうづかうむかみのこみをも移ハシカん  
七日右季周佐の家とく月次事興わす

早秋月  
風すく秋立るつてすく事興三日月乃新

行路薄  
おぐまへやくもまくそそぎもさくじぬくの秋  
鶴宿松  
まととねねくの松をもばと年下鶴宿  
初  
鳴くまのたの川舟がくろとやかくのまくらのあ  
祈  
心立きのみまことなくまくらん神のゆゑよ叶  
述  
懷つの浦ふもろいもつてもうやく破のたびくもく  
十三日平等坊言秋月次よ

早秋雨  
ますよもひくよもぬ林やまく竹すまくむく  
秋夕涙  
のまくなまく流珠の夕涙も同一くまの秋の涙も  
立名恋  
みれぬまく名どくいの市半やまくつむと絶縁小  
湖早秋  
さくらのまく涼葉悲の林よめり子舟のまく風

深夜月ナツモリノ秋の道子人おもてゆきぬ月ナ風を吹け  
穿歎恋ぬこそんねの別説おもてゆきぬ月ナ大のあらわさ  
窓竹風ミハ竹のまなづる日の新月の新命のまに

## 十四日明穿ものくらむとへ

月前秋くわがる新月ハ秋のじくきて細き月のうす  
月如鏡月やちゆき月代のまくはりぬうすの新月のうすとも  
月似昔古のうすすすれのうすの秋月ちゆ月ハ  
薄ほそむぎまきかどと初秋の月ふかくす育ばる事  
穿灯ゑかきうしや通燈のうす燈も見えども一く清きの秋  
鶴せよとくわいとくわいの月は月はあらわす月の色名

## 十五日秋月の月次

三日月まみるあらひの斗ハあらひの月のうす月  
海邊月のきよまははま流よもやなはくうそハ月ナテの白浪  
舟中月近風よほあさすてもお風や絶波の中の月うす  
山家月まみは竹のやのまもももくわく月のくわ  
叢祠月冰底もみはしの湖もみはしもももくわく月影

## 廿日草庵の月次

對山待月まみはし月の出るおもよかなる月つまのな  
海邊見月夕後の入ぬる城よ新もみくらう船屋の舟の月  
月前遠鳴おもむくやみやまん月のうすまみはする月へ

原

當坐

露 まの原風うら風をもよおすくせぬる匂  
寄松島いまとひもじまをもよおむのを草むらに  
古寺鐘をうなづけり山の寺あらへ所なりゆ  
サ二日も落葉のじや合

秋遠情ひくみ庶のそひの秋のもむかしと月をうらえ  
月前舟うちうり月とのせハ昔もつてまく入まの舟を舟  
山寺夕もみりは風は雨のまよもへらすもねまわる  
サ五日ある所すく一夜あらう

早 秋さやある夕日させもば風西すり以ハ林を涼す  
嶺 月巒よ望むれあまに山をよもぎの月をやくわ

辯 鳥アヤなとぞふがくもほが被ふらてちぬ弊を  
田 家林の田のあらうのふる槁をひがくわらう弊を際を  
サ六百修復たまの家乃月次

夕初鳴天元も朝つもく夕け立をうの里ふくやあはらん  
終夜見月出るまく入るまく月もすまく林八月のうさんほのまはる  
朝帰鳥拂ふるく令とあらふ新舊の界すむ波の別説よし  
柳似煙烟とハアのめすみせくかくすのめすみせく日にはれむ  
擣 衣椎室の氣け美をよもぎのまよ海をやすらうもくらむ  
寄月夜うきうき月がけのまよくらむや弊の林のまよくらむ  
古寺鐘絶はる寺もゆの鐘なくは是トナリテよもぎのまよ

廿八日は早朝のほどおまかまく詠じて先源氏  
のお経誦後便ち廿二日詔勅する所とて是を電  
ノトメあくまで百尋のものとす。

立春朝 やうやうと江戸新門の下をやめがくすめむ  
遼夏移 なぢゆうを涼せよす年もひの度の間もあらず  
浪間月 星と月はかまくおほひちと月とめに老もあらず  
鴻千鳥 はるかにそち千のう牛ほく一通のじつとどける  
近心 ひとの心とよきよきくわの心とへうる人の心を  
教説 怪えぬかと心のかみひく神もほのむらむら

## 九月九日詔理たまひ家の月次

赤紅葉 じゆくいの赤きつる紅葉のあざやか  
水邊菊 穂のほりぬまもあまことくよ葉の葉の下あ  
聖亭草 聖亭草 さかとひのやすいとく人をよみよみ語やすはさん  
原 露 くわくわくとまのまをかきよがちる原の林をせ  
見 念我をみみるめとかうの次やくよひかなむに延びのくを  
山家夕嵐 くわくわくのまくらねとおひでよや荒れん  
十二日にわち詔理をまくと詔理をまく入道因  
とくとくにこすの詔をあわし中原  
出居秋夕夕景の秋の夕景をまくと詔をあらうのまのうとく  
擣衣驚夢 近きもかくすまよの浦あくとまよの浦あくとまよの浦

岡邊眺望 まくらとよのあなる秋の田のはあとせんじゆの川沿

廿日草の月次よ

紅葉うせのつみハ途中絶る林の木をもやまくし浪  
秋時雨松もなぐる樹の木をもとむの浦とくわ林  
夜灯ぬよとみゆきハ消る煙のゆよももよゆの奈と  
當坐夢後鴈うきゆきぬまうすえづかうれちよはまくアキヒ  
穿霧悲ゆくゆめのあめのへくたよづかひり人のとも  
閑はくわくよの閑をのとをかよるのとくに  
サニ白有馬氏終師元家ウルよれくまうと歌を

さくわく

風告秋 ちくはちくぬねぬとひくと旅すあらじる林の地をせ  
暮秋菊 くまくま枝すく匂くせし月のまつじ菊の宿のまくに  
惜別恋 あきはりくまくまく恋するのまくに相風と被り説  
教教つてはなむかくとおとくとくのつるをも  
サニ日暮悲泣のと合

萬風 楚々かくくよおひくよや常萬風の秋をせ  
秋霜秋の風なまはや小初音のすとと先小拂りふらむ  
舊恋 そくもくわに紙魚のむく文よほる旅中の林風  
廿五日紅葉盛よくとよかくへと車のほくえ  
あつまくよよだく行焉もとよ道場よくえナラ

の歌をさうかへすよ

早 恨 故 懐

秋已のまゝまきの橋もまづくらむる林のやせ  
愁人や酒もあドシよがれとて身にいりあふ  
郷ともぐもだう林の古とては萬葉の下の通説  
舊事と年とよとをふほじも衣昔とも人やあき  
件の行福もハ或ハ林の門の道傍トヤマカウ  
ニ歌すうも一色もつてこのまゝ所まゝゆるふ  
とくち八月毛佐尋子西度上座高寺石塔  
をまよひたるとばくはくやくやくわうこ又  
げすの坊も是よ周そ一ツ經舟よまくまく小

たゞらのまの徳とひのあらはす林のやせ  
サハ日上緑みのまくとくはうあす

新秋雨風涼しもすとくく林の音のトモ  
モ恨恋しつく恨みもむくとくよ高の二木林風そ  
羈中閑昇あそびとく枕とくとく嵐とくとくまのま  
十月三日竟孝法師

首歌のあそびとく昆けつまほくら葉影をくま  
くまくまくまくまく

惜 鴻  
花絶するむらむらむらむらのあそび  
月秋のよだ干のまの風あれふまきの月絶

夏  
立つる名もぢりしてのひくとみをぬ被のすらし  
四日レ名洋正サ所教考擣川靜謹上湯税三  
の一庵真引五ツ一ツ本山也トヤマニキル  
まくまくする紙をなぐる  
初冬風  
雪朝望  
尋契  
宍路鶴  
名所鶴  
五日後現ちまの家乃用次

三月廿二日

時  
雨  
寒  
草  
洲  
鶴  
残  
菊  
雪  
寄  
山  
寺  
池  
サ  
落  
葉  
水  
鳥

祈 沖流のみまたのめぐらす川せぬかとあらゆるやうに

晩鐘をぬ絶えぬと先くハ耳すかと暮れのまづいとおもひ

十四日草木人へまよへ一遠きをかく

草漸昔ふる雨のうきむをむじよ草とみに半あるまつまよ  
用山月夜のまよと雪がすむるはるはるの松の月のまよ  
島邊雪さのむせのりそむくつるまの風ありかくにこ  
時見鳥をもとづくわぬ波よかくとてじ千をかくすむめも  
遠村煙きよきよはなむけたう里むづみの景かくとくのせ  
十五日飛鳥井中納ミ能親ひよ伊勢八幡法事  
トニシニシニシニシニシニシニシニシニシニシニシニシニ

萩

太神官へ

神 神無草鳥

萩

あづけ八十のあと十すまくとへ雪の道の野を

同日やくくまくに遠きのよみにゆふ

時雨も夜も日も水も雪も見ぬる所も有  
水鳥冰の上に坐むる水もすまぬものかあ  
見ぬきぬ人の爲めとぞ一もめをぬくは寧や恨え  
神祇住の神や生の神の事あふ道ぞ一木の庵人  
廿日草庵の月次

木枯らすも木立ぬ林立木やひの名とかくらん  
寒草花えども立人も立のま枯れ葉よがるたゞり立  
當坐冬心に立ても立るゝ被のまま門あらわづゆゆゆゆゆゆゆ  
行路雪さやにしまくらんがるゆゆゆゆゆゆゆ  
欲絶意往くまきの風のゆゆゆゆゆゆゆゆ  
手草庵たさん井と

閑屋夕々泊もまよひまよひまよひまよひまよひまよひま  
サニ日思ひ度み合

寐覚時雨少春時雨あはれがるもほほ一枝の涙る葉  
冬田殘雁鳴處と因もすまくぬまそめの少まのうつゆかくも  
山家冬風冬風あへくみゆやうすとくとくあとまくおとほ  
サニ日思ひ度み合病の喘息歎秋くじくじくじくじく  
おもづく不口能なまくと正度ま六月の比祇園の  
社お倩やける事あまくふ焉ああととて百  
首の手をかの社よやまくよつる中ふ

三

惜 花 さく ちよかはうせむらわせ 楊柳のすまきとまふもと松風  
河五月雨 かご しよの い あめの い すまきとまふもと松風

森 原 月 夕露も月もそよよ高柳もすまきとまふもと松風

霰 不逢 ふう 雪 ゆき くまくは深雪にさせたのひだりとあつまのね

山 家 やまと け け 美 み とすまきとまふもと松風

十一月四日去八月将军家 まぐわ まくはる氏 うじ 指 さし ほ

まくはる まくはる 指 さし ほ ほ と又 また まくはる まくはる 百合を

萬葉ふくすけのゆふ

初春霞 はつ くはうのかげの雲あらむむかまくらのわくに霞せ  
尋 花 しん 風 かぜ おもむきのすれすれとくらはすあすむのあらむ  
夕花似月 ゆふ かづきのすまきとまのむのすまの月 つき まくらやひと  
嶺 れい 月 つき ちうのむらつまつむくはくはくし老のむかづ月

風前落葉 ふう まへい散の木葉のゆきよひ散きよひ散る

窓烟盡 まど えん えん くわむけむなむくわむなむくわ

祝 言 い まつめぐ人のゆきのまなむかのまよしのまよしのゆ

五日候望 ま のまのまの月次小

曉天半鳴 あ くまもじよの石の教 きよ あくまとえかくよ鳥の歌  
連峰初雪 れん ほう はつ 雪 ゆき かまくまの汀の松風よむくまくまのみゆのくわを

名<sup>ナミ</sup>駄路

とよのゆやひのゆもすむれの葉あつてやまもとぬ  
神樂をあすう音大もと音一月の中のよしとやね  
穿木也あくそよしとよしの名もすぬたくとすと辟  
曉鶴おはやくとよしとよしとよしとよしとよしとよ  
八日ある

寒遅霜もあきらむとせむ一ねのもかせぬきのまの秋風  
窓雪見立もさざなひに一ねのもかせぬきのまの秋風  
田家枕答むと露もさざなひに枕のゆいとば枕かく

十五日日下部家頼住吉法樂百三のゆふ

曉立春くもものかえりとひととものあはくとくとくとく

朝花すけがれあがめむのえと日射すとるとみる玉  
旅夕立詠むるまきと望る人やとくかとゆきとくやまくと  
外山鹿宿にしづきと麻屋のあくとる鹿の神のあく  
霰残夢ゆるおの妻もゆやも向くと多説わちとくとく枕ふ  
偽恋いづくめあるせとくとく恨みも付くあらばがまのゆ

廿日草庵の月次

すものゆのあよまの病ゆすともすまいぬのほの危  
一あきのゆのゆのゆのゆのゆのゆのゆのゆのゆのゆのゆ  
くわゆのゆのゆのゆのゆのゆのゆのゆのゆのゆのゆのゆのゆ  
古寺雪とれ唐やいとみとみの背の筋とみとみの筋と

宿車返 送あしも手とつめの車にやまくまづぬ車あらよ  
窓前竹 吊竹のカツラ枝と切枝く又あら紙のまくら  
サ一二日月の宿院のを令よ

夜絅代 がくもくくいりよ床やなうかん又うみかはよまのを衣  
野深雪 純白のまゆのきよけくまづはたまくまの被ふる  
恨言恋 美もすうまく人情のまよやまの現ハ怨もあむとも

サ一二日平等坊円秀月次よ

河上千鳥 里人もばおとまくめの山川の山よもじだくあり  
山中朝雪 そとみくわせあくわせのきどめくへ里人せうせ  
庭松年久 そとほよもくよくわせのきよもじわよつる歌も

暁更雞 美景公のひるがさきのひうつ幕の歌の歌

十一日恩徳院のを令よ

神 樂が神よ大和くみ御まみのいのまよをよ高大らぐく

冬 梅 すきの木のすき月の木よゆ梅なむかの木の一も

懷 旧 うきよき昔ちよみま夜がるうきせのまよみくらん

十六日平等坊円秀月次よ

冬天象 はづくむくむくむく新あら用よく波るさのりま

冬地儀 ひるまく出湯とひるまく新川のあれるみの煙がむ

冬人事 なむせの昔のまのれも似様なまことかくもくよびて

冬 晓 ひるまくおぬまのまの園のえを日ひおひおこむよ

山 雪 そぞらすかくらる谷の静戸山よきとせの流山ひとゑ

冬通書盡 こづれうせはあなむとてほそる渓のみちにゆすや  
海邊冬 実とくねほほくさく日の満のゆりてはま舟も

十七日草庵より本とみやま中ふ

見絹代 水戸のきどじくあらう絹代の布ふやくの月新  
古屋叢 あくよあくよのむとすたのちとくのちとくのちとくのち  
寄心中 けいよはおりなまくやおくるとくあまくとくあまくとくあまく  
松河筏 ゆりやあらまくらうともせぬ筏をじく意する

廿日草庵の月次よ

暁寒月毛川れどふめく月のことに冰やまのさゆらひ

條 霜 犬さくさくさくさくさくさくさくさくさくさく  
枕 なまく名とくまくまくまくまくまくまくまくまくまく  
田 庵 けいとくにまくまくまくまくまくまくまくまくまくまく  
サ八日或く雪原は樂とく百丈すよ

初 春 つよひのす日みだすとてひよひよひよひよひよひよ

あらむよむのすむむのすむむのすむむのすむむのすむ

郭 花 公 さつさやまの松風擇のこすすむる松よ鳴りよひよ  
萩原や秋名よと松風のひすとすすむる松よ鳴りよひよ

玉の道の松々をせよひよひよひよひよひよひよひよひよ

不逢高 立となくげせの内ハおおなまくひよひよひよひよ

松

ちづるからきよキの少ね持とハ一あよせん神の持とハ  
サかる中原もわかよ神とわかと一讀みてふ

初春霞 四方よもじものくのきうちや海や萬めの下なるもむ  
擣衣たたき衣 う里のこゑのうきやまも木の枝よ打ふるもす  
爐火たまねぐのあつしもすまくのくふね 木のくふねもたまくの火  
寄宿くみすくしなまく 木のくみすくしなまくの火を抱きとまくお湯の所とむ  
旅宿りゆくしゆ 我よりたまひの風すてふすくはく、宵にまわらひち  
ナ二月二日或所會す

積たま

深雪 松林の下抱きとせよとまよるやまの山中  
惜別きべつ あるまき向も別れきとぬくとおも衣と往きまくむ

春漸近かすみよきよきよきのとこの 楠桂又三毛もめうつあく や  
冬述懷じゆそく 行きとくづきとくづきとくづきとくづきとくづき  
海邊雪 少年垣さなわかい のやくとくづきとくづきとくづきとくづき  
杜神樂たかみがやう の社の里神乐さのわ とくづきとくづきとくづきとくづき  
寄冬衣 流り袖なまく の冰ひや をあつらひむおまけの衣きぬ におりるあやで  
旅泊煙りゆくはくえん むあそびの煙えん とすまくほのぬるすまくほの世人

サ四日薄原氏資はくばら 資し とくづきとくづきとくづきとくづき

雪中望ゆきなかむな いづるちやもかほんをもとづくのとくの西の西ふ  
寄蟲絕恋よちうぜつれん まよせののくもよせむじ様よう もよせと恨うらみ とぞのうを寄  
田家巣たんげ 渚なご やくいなむかと田の冬すとおもねらわせらのきとむ  
ちむ

かみの上総久の家の事記

水鳥多々枯れの山の鳥が死んでゐる事多し  
待不堪忍は人の事よりかゝらまつて種をつぐめ  
田家鳥をまよはせ因の爲め石タケシを打つてある所  
ゑはまよせし七十九年生む事無くおかへり  
七年生む事無くがまゆ八つの事無く

春春述

康正二年正月朔日試筆

天久々かのと見るはともかく其やもあえひてくわく  
地往々くさびのあつてはあくまでもすのあまと  
懷かく人のおりよろこぶよほのまのせもうし  
二日の夕の月三日月の夕の月の夕の月の夕の月  
をすまんがくすくほもほくらむる時も夕  
すゑすゑのよきよきとたまつてはるの端からくも  
ゑあくらふと見ゆるあらもちくらの海よりか  
九りよくおきがくくかくらむれおれ

説をほる

出でてつらひのう有志二日の月をすくめめ  
ナシの草、鳥よへまおと達するよ

霞初聳九重の山裏も旅人もさむたまくやまの山ねん  
春雨絶ゆかども風もすこし春も春も春雨  
不見ゑみゆきの山や佐さあにしうみうみの山被

朝

おこなはま一葉くわづかをもれしむ

と

十七日右三陽作の家めのむ始り

立

春

じよとしのものうちよまくはげくまく

忍

忍

ゑみやせやひのめくらむとせと深もゑ

浦

舟ワの浦やまの浦の舟の川もがくじのさくはむ

十八日隆宗法印をうけとく達する一チヨウ中

水邊柳

えさのほの原もまくみくわ一木柳を風ぞぬく

隠

ゑがくまくみくわがくまくのやまは繩縄

寐覺遠情

そめりうれいの西めくらのゆもひぬすみくわ

羈

旅がくれおりもまくわがくまくおゆの床の丸床

サ日草元の月次

鶴伴仙齡

仙人の毛羽の毛や毛まくわとやまくわと

當坐

初

春境まのうめぐの新草煙草なまやのうすまくす

折欵冬

おまくいもとおまくいもと花ばくちづくのう

寄山道もすづりてあらやほのまにゆすみかどくのうち  
社頭桺もむめくる月日もゆなきむらの林葉の新  
サ一日冷泉侍後改為家よへまわす  
残恨祝

雪ほきのまよう消ふるとすまかすとらうをふ  
浦はやくわゆかとくじのからむしめぬ猶もむね  
十が(ミ)のもや向くわつの浦のこまめおめまのとみも

## サ二日恩徳院から令

開路类 霞  
雪消松緑类  
松残雪  
社頭水  
市夢

六八日平等坊因夷月次詠

霞障樹

當坐

霞

鳥のこゑをあらむ風のむ相門もよきくわはのまは  
恨絶悲かなくさうたま宿のまきくふかくひ高せや生がくら  
坂ゆるありの間あひいねとくえのうめや林の市人  
をむかへ現むまとも多の内よかとれくわくの斗そ  
逢ふも抱く我とよがへ來にじくも被るゆきまよ

サ九りや所も一讀あり

早春もすや暮のまくへうらうのまく乃神くせ  
遊絲せよかくあらむかくねがとくむかく坐すとまのま  
逢ふも抱く我とよがへ來にじくも被るゆきまよ

夕

野子の原く里を匂ひ飼の約の毛もつて六月小秋もまづ  
二月三日經系坊より讀の五十九日お申に

初暮春  
引みとほすのまゝにうら月の新そゆきる  
被忘ナミえも教やまからん志見うひなまく咸よくくも  
水郷夜風桂の木の花ももの向むハ松マツアモシヤツモの里人

七日草庵カウアンの來

初春  
もみ沼ちの浦やまくらのいもめいもあらわす  
祈立タマトヘヨリ合のまつは祭りのまつすの社ホ  
羈旅アキラモシタニタガマシマフ烟マツシタニタガマシマフ

サ日草庵の月次

花春神當坐夕鴻花  
梢白雲檜ヒバ木にさりややくにても乃葉おわらん  
田すさやあさ牛ウシの浦マツシタニもまむる春名山  
祇ミタチ我神の我君ミタチセイハ萬マツシタニあさとあせとがまマツシタニ  
花花マツシタニさすまほりふもやまくはまむる花やまらん  
花生まなる汝平ミタチのまほり浦マツシタニ追スル花マツシタニ花マツシタニ色  
色稍マツシタニうつうひ果ハタケ檜ヒバ木みくらる庭マツシタニ花マツシタニ勢  
サ三日恩德院ミタチのむす令

花雲臺マツシタニ海シマ也タマ木のやめ跡マツシタニふすらもほ  
月前花マツシタニせまらのむタマ木のやめ跡マツシタニのれのせまらん

惜

花を失ひ物語りに別れよハクモクは毎の流乃らせ  
サ四日右馬ひの家とく度のモ歩まよへ、遠く  
あつまへやふ

餘寒冰 すくの水よもじくまきこも日敷たる水のれし  
雨中花 雨むのきの夜も被ふれぬ露に夕暮せりあ  
忌 惠 えみくわきよめよあはきりものとちをすつ

サ八日平寺坊を秀月次よ

野遊絲 風のむかの緑のくもあくすまくさく  
閑居花 はなぐらむたの日敷の船宿とまくわくよせ  
古渡舟 沖うき波のあくよく清くせんじゆの底るよ

寄花雲 いのしるのいのいの様もくわくわく  
寄花侍 ねりきのくわくをとまくよせもやたのくわくよ  
寄花寺 もののくわくもあじきのえ人のくわくよ  
サ九日草庵よくよ

江上花 岸よすの津のそりくほゆのゆとあくよ白浪  
園中花 きよゆる園のそりく竹川の橋のあかるもよのれ  
寄神祇花 まことひのくわくとくわくの神祇もよのれ  
三月鈴日修煙たまひ度の花やくよかなよとく  
一謡を一五十九中よ

山中花 花がく風よまくよはよおほよ年のくわくよ

曉

鐘

寺と山の邊にあつて御堂にあつた  
雨と火もあつたが  
二日仁和院とすめらわふ神苑なるものもあつ  
たまちゆくとお寺の門庭の木の井の  
まつよだるひま橋一本風のうなまくやう  
まふみとゆまへ

吹せ竹のまゝやまざく花のあ寺のまを風  
三日車のむ若玉寺へける將軍家康成と  
タマスモカムシキふ諸毛と毛谷大河は  
一もやなまを毛谷とあたかのま

みさきの信經舟をかへ一さきのふくまみヒメ  
さもうちとくもじむじむじむじむじむじむじ  
ききよと若玉寺のえりんはるふまのへりまが  
ひくこのすまあのほづなふ諸毛と毛谷大河  
人の渡經舟をかへ

雪かくらむのうのうのうのうと福の波をも  
うれうも花頂かなみくめくめくめくめく  
りよ道場よくへ一讀あまへや

遠尋花唐もくせきよみ花也とおひら  
旅店花あやの旅ひなまち花筵やねもあそぼうせ

寄花恩遣 口アラシモテモトマニ花のシヌガシヤアモ  
寄花懷旧 緋ナツハモヤムニトナヒムモヤシイの名ハボル  
寄花教 くモキヨテヤモシヒヨーのモノモレハモ情を

四日桂厚喝食モモモ

花 盛ナリソシモテの様リモテモテモテ花モモモ

忍 忍セシモナリモトモ源モソシテモモモモモ村

釈 教モモモモモモモモモモモモモモモモモモモモ

五日壳実法橋モモモモモモモモモモモモモモモモ

初春雪 ムモモモモモモモモモモモモモモモモモモ

枕 蓼 ムモモモモモモモモモモモモモモモモモモモ

寄苔井 ばせシモトモトモトモモモ苔モトモモ苔モモモ

泊 煙 ル舟モカモモモモモモモモモモモモモモモモ

九日鴨部之基典リムモモモモモモモモモモモモモ

霞障村 ハモモモモモモモモモモモモモモモモモモ

賞 桃 ゆくモモモモモモモモモモモモモモモモモモモ

春遇惠 ひまちモモモモモモモモモモモモモモモモモ

春絶恋 扱<sup>ヒタチ</sup>モモモモモモモモモモモモモモモ

春山家 付モモモモモモモモモモモモモモモモモ

十二日官道親忠家モ候モテモモモモモモモモ

モモモモモモモモモモモモモモモモモモモ

山朝霞 絶えよ大内のあすをやすものやあもけなまくらも  
造内裡の急毛一かずかくおちてふるくら  
沫也

夜時雨 梶よりすのゆくや里とみのぐのねまの袖ぬくらす  
稀逢鷺 たのやハ昔の林より平なまくもあゆるうのき  
名死鶴 つのまじめを友鶴のもひ枝とよとくもはまばのねむ  
十四日綱川阿波守頼久の家より遠くうづに  
霞知春 ゆりのの葉あもむかよしにそがむるみゆのうこす  
恋 泣絛よ門や涙の門内女うき涙のまよひをくわくわ  
羈中憶都 日よ摩るやくのきとまよひよのきりやのむか

十五日竹りも住持宝寧修理方まよひく一读

あまくわふ

梅香留袖 桜むさくやなうそのあす衣あ夷だしき袖も匂く浦聞  
寄塵恋 あともなき枕のもとのむごとのうるおのふせまと拂ひ  
山家松風 よやくすののねの風うるおちまやのむくに住む

十八日修理方まの家より遠くまよひくのゆふ

閑路霞 まくらゆのあのもよくやハナ宣くゆの四才の旅人  
恨身恋 じよよその延やのむこうを袖のひらとく風く夜よみ  
谷 松立山の先をせやすまんむの谷のねりくわせ  
古 寺三国くわきよみゆきのさくわと思ひのえどもる

十九日は一盛なうどくがるはんぐくよとくせん  
そくをほよあるやをもとく讀おひすへ  
中本

初春かもやわづらのあわたるやものあがりて  
躰躅いとよよめがつゝみゆきよよものよしゆがくとせん  
艸急うかくうみじいの歌と歌とせんとせん  
關路被ほぬ名をたびの秋風や關路被ほぬのうへ  
廿日草原月次よ

山残鳴あまきうるむれの音あまきうる老りもあゆのむらゆ  
湊暮春延もじしきの小舟りもと港もくわゆかくも  
懇切懇人やうれすむととととととととととととと

當本  
春雪消ちよなる日解くもふちるやの音のうをのえす  
寄河恋ねよくとくの川のうとはたなづくまのうすへ  
旅宿夢かほの枕うらをまほとく宿のうらうつるまのう  
廿三日恩徳院のあい合

蛙あうれううのうのうをたず風ううをねうううのうめう  
残春少流まうどりのうのうのう物とたゞくうう月ううゆく  
羈中恋あまうくぬくやうくかまうくをよくもあくへん  
廿四日細川右京大夫勝元家の月次よ  
早春天出る日もえもあまうくのうのうの人もとむらじ  
更衣をうそねううをううううううのう衣ふま風う

秋 田一の手筋もさすがに秋の手の間のむづうで  
尋 悲しきの御門をさすれど井筒もぬらりや汲みるる  
神 祇 まへきむちとくらひやまくらふよみとやむ  
あるかせり將軍家ゆく八幡寺年宿あるを  
アカル也

## 廿六日平守坊因秀月次

田 鮎 もとたもちと圓てのあくとさくと水の桂の木のくじと  
春不留 まよひの暮の絆ともすかその夜よすかもから  
忘 兮 じゆくとつひよすてお星の源斗のせもと狭き  
當坐連峯霞 もとよきああーの霞はいざも暮の色ハけづらむ

江春雨 江のこの水すまほひよすくねをさむる春雨  
寄思艸恋 ねと絶ぬともかくわの恋ぬむく懐そ春のやう京  
羈中晝 うちわの道ともすよすきてかくすぬ日むすれ飯  
廿九日八幡先社勢平守王院立清もとめて  
草原風よすみそ一昔のこととかくやけすかく  
アカル

あはの林ひばりすまほにまも出づる夜よあひて  
便立清ハ先祖至りの祀又ヒテ是事なりセ  
アカル

れメのむの食のあやまことすよあひゆる君を拂ひ

晦日鴨部之基 □ 法樂トモ百三十九

立藤 春雨も亦總てえく新事も甚しけれ風をすすめ  
花火花火かまくらもあくの度度に延べども

五月雨五月雨もれまくうそこそもくら友あるうとひ五月も霜  
擣衣たづねいもすもやきもすとてぬの霜の衣  
氷鳥ひきじりのりての衣おのなとたらきとわらと紳たまるたまるたまるたま  
寄猪ききれ我がの人のひづるふねまきをもつてひと  
山家さんけ室むろの小風おほもあぬりやかなのうきの霜さむるる  
周防すくは國くに大内おおうちたかをま教弘きみ跡あととゆく  
西高せいこう鶴つる江えと向むかひと風かぜくまく

お道事おみち一いか達訓事たんく事ことななよよくくくくも  
至極いたごくのの屈くかかもも一いはは隣生となり則そのの  
ささくくげげままああくくささくくくくくくくくくく

岩崎いわさきののううののうう先せんややんんののももくく風かぜ便びん  
かかくくここれれとと續つづ後ご撰せん集しゆななつつくく

四月四日右京うきょうののおおののに

首夏朝しゅか六ろく新しんののももくく風かぜ便びん  
寄鳥きとり也やおおののよよおおかかのののの名なををかかせせむ

故郷木 うちきやしわも風とやどりけむすへあまへあて

五日修理たまのきみは月次よ

山首夏 さきやまへひへの衣うぶくやおるもあたまらむ  
互思恋 あいゆうれんとひよほんからひやまやおもむきうだらん  
窓前行 家の内ふゆのまよ是行の一すあらへる旅を  
侍郭公 おひら雨のまよもつまくくまくまよきのまのを  
家木戸 名前門あくまきにはばのせんぬのまのせの垣本  
神祇 えんきよあくまきも酉の日とがやまつらかのまつ垣  
七日右馬 ひ家づき法樂とく歌とおと舞よ小  
遠山花 はなはなしあのじら穢おじらんまはぢやまのを

行路市 こうじやまとひつとく市ひつとくのまめもとをひ

九月右馬ゆま歌佐のまめよく正月法樂とく百首

あくまくふ

立 春 みも本も春も立のまよみにじはしほくひゆあ  
籬籬數冬 すくすくはや絆のじはく一絆するもすまくひ  
雲外鴈 教ちくねさのひよりせんつやまるの一まちの草  
惜 月 きくや月のまつやまもくせよみひよく  
松 雪 風 くもくわすまきたむやまくまのねくらのゆえ  
寄月よづき よもくまきよほの風もくがまく月の舟あつて  
夕 野 まきくまのゆくまのまくまのせきまくまく壁の夜

述懷老矣久不作詩。今聞此頃亦復

十八日藤原久景より一通至る。

林早夏  
船路  
鶴舟  
廻嶋  
恨  
愁  
夜過  
開路  
よひの後  
通説  
よひの後  
アマリ

廿日草元の月次よ

船路  
夕花  
薄暮  
郭翠  
古寺  
残月  
廿二日是酒院の月令よ

餘花似春  
雲外  
郭公  
夏月  
易明  
雨中  
懷旧  
廿四日平頼資より一通

書  
白鷺飛  
廿三日是酒院の月令よ

郭公遍  
羈  
中  
も  
か  
く  
の  
鳥  
の  
放  
ハ  
を  
よ  
う  
の  
放  
人

懷旧淚せよと一すまく涙よあらじとおまほのとおもひえ

五月四日右京さまの家の月次よ

夕 霞 人のせのくさる葉と夕雲もあかうや、三つともうす  
短夜月 うなづくうめうとう聲の絶和と月がくわんとあらむ  
忍涙ふ うかせりゆを袖よどまくぬ涙のむはまつてかく勢いよ  
深夜灯 いろねん窓とあよ板のくみのそくやまくあひのせ  
み月五日修理たま乃家の月次よ

菖 蒲 すみれかくも月のすれやまとあやめの羽の絆  
鶴 河鳥の名もすもうとひともとあらすくもとよ入る  
嶺 雲 まれまくみのきのねのねくよせ、床をゆづるやまと

夕春雨 まよひがよみのまよひしたまよのうひむるべ  
暁郭公 おひたまめの曉ふまよみのまよめのまよめの  
見夢急 ろよきこくまくよ夢のまよかくよ枕あくまよるふも  
旅行暮 ゆまよみねむよくばくよきがまむじもよまよの旅の暮  
八日阿波守の家よく遠きうちあつゝ一カよ

首夏郭公 あたじふ月のすのせへ旅とよくものぬ故ふ  
寄風悲 人うねぬまく風のとねまくうふきよまよの似  
泊 烟 おきかくよく夜ふく風ふ毎よくよくまよの  
十六日平頼資 まよく遠きうちよのゆ

夜夏移立る秋の風に引かれて乃持へばちふがま桂風  
寄布もこすりてうきの唐もとをとあせまし御の達を待て

廿日草原の月次

早苗田中なる村の傍に植へるすすも津波を守り  
五月雨あらわのむかがまのひびきてはる也一本三月雨の  
誓雷坐あたのめもたゞ鹿の山一本のやまのあゆみの船  
花ゆだるすの様ちうのせよまつる風二本やむけむさ  
寒草氣二本もまの草氣あはぢすよやれぐのまほの草  
獸色二本我の月よ枝をむくるもあしむわく人二本もくや  
田里二本かみよく稻葉をもくすむらの山の旗の村風

橋  
颶  
暮  
山  
雨後罷麥  
返事増急  
殘月越閨  
橋帰鴈  
濱千鳥  
寄檜恋

人二本  
の美二本  
の美二本  
の美二本  
の美二本  
の美二本  
の美二本  
の美二本  
の美二本

麓 柴 オホリサシの木をまからておおむねとくわど絶りとくわど

六月四日右京たまの家家の月次よ

羈中真葉しめをもくとくすよへり鳥のものむかのを説よえひをすう  
家秋草意いをもくとく林のすまのむくみれやまとくやも説のとくせ

十一日平松資すけをもくすよへ説すう

夏 雨 あめすうへきの小まの朝をすりやまくはおもあま序を  
夏 枝 ある葉をもく同年の枝のまく緑をもくす葉よきを掌す  
夏 行 六月のまの月数と一本もたぐの枝をひきのまくほくあまも行  
夏 急 急足きゆくつよひや涼の水をもくはみれぬるくゆくすくあれ

廿日草の月次よ

水上堂 氷をのらのうるおもくかく堂をもく床の床の床を  
晩風涼 ゆふ風やまくにちまく草を風を拂つまく涼すずをも  
幽徑苔 幽徑苔 日草日草をもく山山がまくえあるこの苔のむくろおもん  
郊 花 神ものや枝をもくじ枝をもくまの枝をもく候も  
寄鵠寄鵠 鳥もくおもくよらしのせめくおもくとせむらわやねよくらん  
短 夢 さぬるやねのうくまくのたひよどるもくばくとてあさ

廿二日恩徳院の月令よ

遠タ立 ケル あさくハタミ涼すずをもくみくまくしる門を一乃ひ  
閨中扇 半まの月のあくまく涼すずのあくまくのねやの一扇一扇  
山路槁 ひだりぬせよほくとくせよほくやあのかじめ竹竹の小じめ竹竹の小じめ竹竹

七月四日右京才の筆の如く

秋田おとづれの梅のつやめを生民の心やまめても  
別無書もさうほめ被ふかくとほまく詠みのりの筆の下流  
浦松風カミツ風もまぐらの下流おとづれからも清きぬ龍門修  
五日右馬ひ家より一讀あま一小

水辺初秋なまくのりやうて門口の一葉そよぐ每朝ても  
寄秋地カモヒあと秋の色すまかきりねに出のまの草すよちとも  
殊懷旧ちとせぬ昔の秋とぬいはゆすよかよかやまくさん  
七夕修習たまの家とまへ七夕の後すよか

七夕祭流の星のまみ果もかくわらしきぬちよけだよみ

寄送赤板原なむじく井の下を送るまくても誰とすくも  
月中燈友もあや十波づくとえと一圓と赤原と村の煙大  
遠村竹是行のなむくたはるや説ひらんきやのむくの里と  
サ日草をもの月次よ

早

秋彦手の手とあよ一葉うちもとく林の地風  
秋田鹿カミツ鹿もくじきも絶ぬとくあるて圓と井のまの鳥  
寄秋夜カモヒやくもむくの宿の秋の月旅とまよひすよかく  
蚕近枕カイシかのほのほのとくとくや枕をとくかよひくかく  
絶色カモヒかのほのほのとくとくや枕をとくかよひくかく  
洞谷カモヒ水谷川のちくわなみねばかよせよく水のこゑよ

廿六日上総久のをめよ遠かあまくやよ

初春霞さるの裏の内があつやまもやあるもあらん  
時雨過了も行ひとまもあ枯れ付てやまくもえ  
神社道も神の道とあすとほづれまきりもま  
八月三十日至たまの家の月次をよ

上弦月立つ月のかみは月入に沿ひておまくいせ  
終夜月がまくと仰そまんやすも月もまよあゆまくも  
月似心もまよむ月もまよむ人無からや月の漫たまし  
七日月流波のす合よ

薄七月分 風太くよおつまくやうのまうゆの音枯風そよ

秋 夕うき付ともくくまやまうねあくくくわの林の夕音  
忘 惑をの音を忘れまくとまくやまくじきとまくやせ  
十日山名大歳大浦之朝草原もまくふ  
初秋風 天が女りや玉琴の音のまくまくふのまく  
恩待悲ひな風の音やたぐれに行きゆゆくさの妻音を  
田家鳥民の音よかひおぐ秋の馬牛もまくおふとまくとまく  
ナヌ日修理たまの家の月次よ

暁達虫もとこみてなあひとお本とやまくひるあく音くどん  
月催悲たのまくまく引説ごとくくし月ふくよよもく  
羈旅遠車くほくよるも日かひまあれ小音くめくくのま

當坐

未出月 待先月の先うたくやもひあまくに匂ふす  
 月下萩 岩はすよおひすゆつてや思月あくやほのをさ原  
 月前猿 猿さくまの月の桂風よ山鹿へくらん桂のさる  
 山家月 溪さくまがくまの山家はあくまつは月八わくい  
 木回り平等坊円秀月次

秋七月分 夜 教 田 葉  
 風 落のもの風をかすにひきりて日毎よれのあくまづけ  
 虫 のむし ぬまもまよすあよ序よじくすめあまくよぬな母おやしめん  
 教 くわく かくみのひのまくまく絶ぜつくのとくとく  
 田 たの ちのくら庵あんかくくらう新しんやくわく門もんくわくわくの小山田  
 葉 よ えのくわなゐほきせの梢こずえとくくくのあくま葉

障海

無 む まくらがくまくらの涼すずややかまくらを落おちの下したの障さう風  
 每 まい くまくらがくまくらの涼すずややかまくらを落おちの下したの障さう風  
 廿三日草庵あさくらもよく山鹿さんろく行ゆはる祇園法樂百  
 首しゅ南なん度ど

立春風 ひきふう ひきふうひきふうの風かぜよだらがくまくらをくまくらむ  
 雲間花 くもまな くもまなひとくもまな匂におのさまのさや様ようなるらん  
 タ立 たて くらう桟ざんの板いたもくらうやくらうあるあくまくらの風  
 暮山鹿 くわ くわの色いろ消きりそとくもくらうの色いろくら庵あんやくらす  
 月似冰 つきひやく つきひやく月つきとおなまくねとくもくらう人ひともくらう  
 落葉深 おちば おちばお葉はのかくくもくらう教くわくくらう

馴 惠言無よしもとくに候どミ候ニシテカサの私風  
用路鷄 あくらうゆすはなむかくまほの屏乃持  
廿七日是迄度の令今

月前雁 羽のちも近ドリケモツ桂風の月の萬ふせうおこゑ  
月下擣衣 さえのやるきもホコヌクモアキサヤ衣の月そ美一本あらそ  
月似古 やまと袖をぬる人の物も一いつ月乃後みそつ美を

廿八日草庵の月次

初 鳥 秋立り鳥の鳴葉まづひちるはる花もく虫  
河 月 約あくまくかわあくじのくまやまのくまか月の川みきつ美治  
古 松 桧よもぎとぬくめのねじひのくにくらむたひよ

嶺 鹿 けのくま里の旅の鹿の鹿のちに夕やくのまとの里人  
海 鳴 いづくまてくらはるくつたはよおきくさく延きのくまと  
絶後悲 流 くはぎのうき橋まだぬくはりもなまく声の  
江上鶯 さうのうの川のみちう津とすくらむ歌のいり  
同日八幡愛坊とちの隣子に八景のあまく見  
らしゆ中よ

江天暮雪

有注

同夕山名修煙をまへ道を縁の子息与ひ郎政清  
もくめくとすく尾すおもくもあゝる小經冊  
くようそ嫁もくはりあるくよくせつわのうら

あへ

べづうハアの庸風ひよをのほともどる斗了

サ九日平野賀小一本もとく達也みすふ

浅茅月え衰シテもすとくはらめ住人の村の山あわせちよの月  
穿秋旅リ訓ルもとくまく衣旅ヨシリよきぬシテトモむこの月を  
往事渺茫ミツマタもとむきづれぬ古シテのあまきみれ詠ウニがれ  
九月二日ヒメニも扶病費スヒヒツとシテも先に傳シテ年十二  
太平額資ヒラクシ三千多款シナツシキ不シテもはる生シテ歌ウニか詠  
まことシテトシテはつに向シテなまくみくきシテくる

月前風ヒメニ世よ度シテよほす名シテよ月シテ生シテ風ウニをす

廿日草庵ハヤシの月次シテなまくみくきシテくる

一、まくいよくいのくき

露染山葉カシ林シのあきの處シテの上シテ塗シテするきなシテ四才シテのあせシテ也  
野草欲枯シテ又シテ更シテの秋シテのむの林シテのあみシテの林シテのままで  
當坐寄海人シテ愈シテみシテゆシテあシテのきシテとシテ川シテ消シテむシテ一冲シテをシテほ  
秋シテ田シテ因シテなる民シテの度シテ六絆シテのめシテほシテをシテふシテる間シテのあ  
秋見シテ夷シテすシテ木シテのきシテやシテ川シテ木シテ葉シテ十月シテとシテほシテのこシテ乃シテ京  
秋述懷シテけシテりシテきシテ木シテのきシテ風シテもシテあるシテおシテおシテりシテて  
廿二日草庵ハヤシ終シテ中シテ小シテ因シテ也シテ左シテ下シテよ南シテ清シテ代  
のあらシテの清利シテけシテりシテるシテとシテ人シテ使シテせシテるシテよ

／＼ふ遠くすやればちやかよ

霞春衣に社セリシカム衣にせキアリスモノのかく  
故郷露宿シナキ住ク人の心のおく處やあちにゆるの聖  
神 樂白舟の神事とくかのまの日新の多のせきのま  
松作友御もあに我老のまよあひおひの意のまお衣やく  
十月五日修理たまひ家の月次と燒失一也  
み一ふよそくはきくもふ又あましわざくしむ  
初時雨神と月々のねどもみくめとねすかまうれはる江  
江残鳴流き江のせアのいももくつぬととまに翅すがくし  
樵路夕ぬきつやまひ枝のかるらん夕あらぎのたせうのま

時 雨松風の間のバタのあまくさくさう嶺のまくらぬ  
寄草急村ほりと妹とお化よかげくなてもゆくのまく  
嶺 雲たきゆるさくもじつめさんまんじる仰の嶺のまく  
十四日僕が入道渾元月次とまくくなつまくと  
再無とく情義とくよしめとくもゆきともゆだなづ  
詠くまくあまくよしめとくもゆだなづくもくはる

落葉深すくやつるも葉のまくらぬにまくまとせあん  
曉寒月をほせまふ冰とみまくあつまくおまくの月を  
寄國祝さうともか神とくよしめのまんじる大和の木  
木 枯つまよまくらん万葉のやうあれり木枯の風

別 無事の度のまづ砂とむじ皆もむどくと碎くと  
故 郷 えうやさあらむ相手のありすきの神を

サ日草元の月次す あくわかく一よ

暮天霜り月も夕雲もあらむ朝のまづやたゞ夕歎のかく橋  
湊渡类千鳥湊おりづやくあもくはよつまくすもるも  
名所市當坐つれもかく人やなまく住みの宿の市のねのうも  
雪中炉火セツシロヒさくまのくまのうのまくはよもとまくほくゆめ  
穿松恋ツルマツ月はくよくまくわのまのせまく扇すをと  
薄暮嵐ハタハタもすまると我とゆせくのまよす扇す

サニ日忌院院のうち合彼院主依遠伊弉諾守

秋時雨九月分神くさくさうも昔の歌のまづやく社とくすけのふ  
遠樹紅葉立木くとくあそのまづやく出るせみはるの歌のまづや  
穿鳴鶴アヒルまづくおさくもととがくらんきのうひをよけ入るも  
或人の月次とく一いふまよ所ちくと経なまくと  
遠伊弉諾守

落葉風十一月风す風すもすらまく歌あるの海川のまづ  
霜夜月十一月月ぬき音のまづくとくはるまくまくの歌  
社頭祝當坐佐すやねの歌よ詠ヨウヨウて歌あるまくまくの歌  
初 冬嵐作歌のまづくはるまくの歌よくまく

誓 忽ち船内神の御事の間がくのせ  
羈 旅宿としゆくなどさへはもんなる約束よしゆくの間ま  
一 日あるべく一 渡わたべく

月一本

霞 知春しるはるを拂ほすの煙えんを拂ほすの霧きりを拂ほすの  
淺茅露あさらのを拂ほすの露ゆを拂ほすの朝あさを拂ほすの  
紫 霞しゆを拂ほすの朝あさを拂ほすの霞ゆめを拂ほすの朝あさを拂ほすの  
別 离わかれを拂ほすの朝あさを拂ほすの離はなれを拂ほすの朝あさを拂ほすの  
遠樹鷄とおじゆけい月つきを拂ほすの朝あさを拂ほすの遠とおの木きを拂ほすの朝あさを拂ほすの

五日修理りりよをまの家の月次げつじ

寒

月 部ぶを廻まわし月つきのあすをもりあそびまよひの病びやうの候まつり

水上雪みずゆきを拂ほすの川かわを拂ほすの雪ゆきを拂ほすの水みずを拂ほすの  
遠とお急いそを拂ほすの急いそを拂ほすの遠とおを拂ほすの急いそを拂ほすの  
當坐綱つな代しろ雨あめ川かわ風かぜを拂ほすの急いそを拂ほすの雨あめを拂ほすの  
穿管うきぬき急いそを拂ほすの急いそを拂ほすの穿管うきぬきを拂ほすの急いそを拂ほすの  
遣おと水みずを拂ほすの急いそを拂ほすの遣おとを拂ほすの急いそを拂ほすの

十一日あるべく一座いちざあつまつ

春 垣いは池いけ顯あらわ  
雨あめを拂ほすの急いそを拂ほすの急いそを拂ほすの雨あめを拂ほすの  
葛くずを拂ほすの急いそを拂ほすの急いそを拂ほすの葛くずを拂ほすの  
冰こおりを拂ほすの急いそを拂ほすの急いそを拂ほすの冰こおりを拂ほすの  
鳥とりあひぐとはのほなむねのむふ舎やを拂ほすの鳥とりを拂ほすの

海 路 ちくほのゆるまほくのまよあはかすりとつあはせ  
十三日平野原をとどけ 繰りの中に

夕落葉 風吹きの入日の詠さへくらまめくらまふら  
向炉火 わたりのいのいよおろかのまよしめぬせよあはせ  
恩逢恋 恋ひおもむきと重むらむくなよくおもよのうてす  
旅宿曉 ときひや胡 えあんかのまよとまよと宿すよあはせ

## 十四日恩徳院を合へ

十月木 枯 うきせよとがくせよとあらはあらそよとよ枯  
寒 草 くさよとよとよとよとよとよとよとよとよとよと  
十一月夜 燈 かづき消ゆやもすまざるに壁の子葉よかくよ

大館兵庫頭教氏兄治部少輔 □ 七年忌争ハ

ノ一謹書き

冬 泊よ八キモガニセキのまよお絶よまよまよまよ

雲 ぐれもすよのやくすよのやくすよのやく

教 惣をもじとほのきのねつたる枝もまく祀花

廿日草の月次よ

冰用細流 レ氷よ冰よ水の谷川や川の中央よ

雪中遊真 トモハリ トモハリの空の静けさもとこ無くたる小舟

恨不言 トモハリ トモハリのいのとほりあとむか延きのちせよばくよ

梅 花のすよすよ秋の月す秋の月す秋の月す

深

會本

雪日暮るに積みだよほどのとての浦せ  
ゑ未だ雪むかがるもあつて教の雪よなは  
教さすがといけぬがいわゆるあらうり

逢

會本

サニ日恩徳院のう合又か寺モ一泊する  
まくらよしめせき

舟中雪ふくらるせのちの舟の内よしとる一宿人や

船

會本

袖氷重夜ぬひのうおまの被ひたててゆめのまくら  
薄暮雲ナハシマツリテシテ此のまくらのまくら

大へる平教次スモ一寝一寝あゆ

野

會本

朝霜がまどりむるまよがまやく同拾やまくらの教せ

馴不逢<sup>トモ</sup>呂<sup>トモ</sup>ミタカ<sup>トモ</sup>衣<sup>トモ</sup>の福<sup>トモ</sup>と<sup>トモ</sup>か<sup>トモ</sup>め<sup>トモ</sup>か<sup>トモ</sup>人<sup>トモ</sup>人<sup>トモ</sup>  
海<sup>トモ</sup>路<sup>トモ</sup>人<sup>トモ</sup>の<sup>トモ</sup>の<sup>トモ</sup>の<sup>トモ</sup>地<sup>トモ</sup>を<sup>トモ</sup>も<sup>トモ</sup>く<sup>トモ</sup>あ<sup>トモ</sup>は<sup>トモ</sup>同<sup>トモ</sup>

十二月四日右京たまの月次

暮山雪<sup>トモ</sup>か<sup>トモ</sup>の<sup>トモ</sup>の<sup>トモ</sup>の<sup>トモ</sup>の<sup>トモ</sup>の<sup>トモ</sup>の<sup>トモ</sup>の<sup>トモ</sup>の<sup>トモ</sup>の<sup>トモ</sup>の<sup>トモ</sup>の<sup>トモ</sup>の<sup>トモ</sup>の<sup>トモ</sup>  
窓<sup>トモ</sup>立<sup>トモ</sup>通<sup>トモ</sup>すの<sup>トモ</sup>の<sup>トモ</sup>の<sup>トモ</sup>の<sup>トモ</sup>の<sup>トモ</sup>の<sup>トモ</sup>の<sup>トモ</sup>の<sup>トモ</sup>の<sup>トモ</sup>の<sup>トモ</sup>の<sup>トモ</sup>の<sup>トモ</sup>  
水<sup>トモ</sup>鶴<sup>トモ</sup>鳴<sup>トモ</sup>は<sup>トモ</sup>の<sup>トモ</sup>の<sup>トモ</sup>の<sup>トモ</sup>の<sup>トモ</sup>の<sup>トモ</sup>の<sup>トモ</sup>の<sup>トモ</sup>の<sup>トモ</sup>の<sup>トモ</sup>の<sup>トモ</sup>の<sup>トモ</sup>  
田<sup>トモ</sup>家<sup>トモ</sup>林<sup>トモ</sup>と<sup>トモ</sup>の<sup>トモ</sup>の<sup>トモ</sup>の<sup>トモ</sup>の<sup>トモ</sup>の<sup>トモ</sup>の<sup>トモ</sup>の<sup>トモ</sup>の<sup>トモ</sup>の<sup>トモ</sup>の<sup>トモ</sup>  
六日右京あ伏<sup>トモ</sup>新<sup>トモ</sup>次<sup>トモ</sup>家<sup>トモ</sup>と<sup>トモ</sup>の<sup>トモ</sup>の<sup>トモ</sup>の<sup>トモ</sup>の<sup>トモ</sup>の<sup>トモ</sup>の<sup>トモ</sup>の<sup>トモ</sup>

メモセ付<sup>トモ</sup>

雪朝望<sup>トモ</sup>家<sup>トモ</sup>の<sup>トモ</sup>の<sup>トモ</sup>の<sup>トモ</sup>の<sup>トモ</sup>の<sup>トモ</sup>の<sup>トモ</sup>の<sup>トモ</sup>の<sup>トモ</sup>の<sup>トモ</sup>の<sup>トモ</sup>の<sup>トモ</sup>の<sup>トモ</sup>

炭窓雪  
社頭雪  
毛氈已  
衆中  
事一  
薄も

庭松年久  
當坐  
霞春衣  
山紅葉

雪朝望  
窓竹  
十二日  
達也

冬朝風  
冬見獸  
冬旅宿

十四日

歲暮松  
寐覺鳥

澤邊鶴 空氣の匂ひ衣とたまうる特場のひよしを寫也

十七日あるふとくよすああきーふ

海冬月 カタカタの音の遙かへせんじて烟の波も日暮れの  
寄夜衣赤か一色の衣の匂ひ空氣の匂ひも絶えぬの通語  
古寺滝水日の影をみゆるやす雨がぬ時をもかに流りゆく

廿日草庵の月次よ

柏 霧ちのむのゆきうすねりのあはやりくすら委るる  
夜 食まくやほのまく床にそ満のすらす日ゆくれ  
夏 鳥ミガヨ見ゆけたるものとからはおぞめくうさぎ  
寒 松緑 しわのまづやなまうじ緑り銀のさうふとくせせひ

寄帶恋 まゆうをまよひのじゆうにゆうてハ持すすも下下井  
寄蓬恋 秋もア葉ういのひをまくく被す時もゆきゆきは  
行路市 あくともかくまくくかのまきまくも寂の秋市  
サ二日あくともかく一遠あくとも

狩場雪 くまかかくかかくかかくたるうをあがむさのうと  
歳暮月 新月をあがむうとけりまのひしとや月もあがむ  
海邊松 まつをまつをまつをまつをまつをまつをまつをまつを  
常盤木雪 二木の木をもつて木をもつて木をもつて木をもつて木  
歳暮炭竈 木の木をもつて木をもつて木をもつて木をもつて木  
逢後夏 まつをあがむたゞまつをまつをまつをまつをまつを

風破旅夢をまよひ故の荒れ木も葉と波の音をきく

す、二日三日もあつて未だトモリあらずふ

網見代里の名もともかくおうきみの川もよしとあらすじ多

惠やまくらめやうかくのいはせひきよひとまつてす

故海見路ワのまゝお近道、舟楫と渡渉へりと一日うちに

郷古とたゞのまゝむすびと前引る道乃ぞ原

サ八日停泊たま家より至原清樂の百景の中小

遠山霞をまちる暮と山中すすむ古き人乃ちのむす

老惜花もあゆうてすくまくもあゆこのまちの花すまいか

五月雨、身教とまむねまの雨をさうなづせやれよ

身教

湖邊月夜衣うつ風すけは涼すむ身は涼月ハ秋よく  
夕紅葉根のむすめやくはくわらすあもむかにまよえ  
原寒草そぞれ枯生のやまと打早くさむかたまくさの淡め  
後朝寒さぬかほはづきかづくで床の匂すまほの匂す  
草庵兩度まよひ窓のゆきとよく又またの雨をさうなづ  
故郷松が峰や来学へまづぬくやうのと門の庭いづま  
新教水おつづくほの衣とほむとまよひ枝の水のうづ

子雀

十二ノ六十二止

